

「永享九年正徹詠草」

—— 解題と翻刻 ——

稲田利徳

解題

正徹の和歌の新資料「永享九年正徹詠草」を、大東急記念文庫で発見したのは、昭和三十九年三月のことである。その直後、「正徹の伝記をめぐる二、三の問題」(国文学叢34号・昭39・6)なる拙稿を公表し、この新資料から明確にされる、正徹や了俊の伝記を考証した。そして、機会あれば、資料翻刻を行いたい意向を抱いていたのであるが、今日まで遅延したこと、深くお詫びせねばならない。今度「国文学叢」が、資料特集号を企画したのでを機に、簡単な解題を付し、この新出資料の翻刻を提出したい。

現存する「草根集」には、永享年間に限ってみても、永享三、七、十二、の各年の纏まった目次詠草は収録されていないが、正徹が、歌道への精進を続けている限り、先の各年に詠歌しなかったことはありえない。多分、正広が「草根集」を編纂した当時、すでに散佚していたのであろう。

文明十五年(一四八三)十月八日、三条西実隆は、足利義尚の打聞資料として「正徹詠草」から秀歌を撰抄しているが、そこには、

正徹詠草 長祿二
永享九等 一冊 廿八首抄之
数首之内絶妙物也

(実隆公記別記) (注1)

と「草根集」にない、永享九年の詠草が対象にされている。ここに翻刻する「永享九年正徹詠草」が、「実隆公記別記」のそれと、同内容かどうか判然としないが、その可能性はあるだろう。

大東急記念文庫蔵「永享九年正徹詠草」(以下、「正徹詠草」と略称)は、縦二五・七釐、横十八・八釐の、袋綴写本一冊。表紙は、金色紙表紙で、その上に覆表紙の緑糸網織物がある。題簽なく、剝落の形跡や墨跡もみえないので、最初から書名を付していなかったものか。従って、先の書名は、仮称である。本文料紙は鳥の子。巻頭に二丁、巻末に二枚の遊紙、墨付すべて二十九丁。一面十行書で、歌一首二行書、歌題や詞書は、歌から、一―二字下り。本文最後の二十九丁表に、次の奥書がある。

招月清岩

永享九年七月十二日書之

仙密主 まいる

さらに、二十九丁裏に、本文と別筆で、

此一帖詠歌墨痕無疑者乎

如今慶長戊申仲秋十六日一覽

之次記之

也足叟(花押)

と、中院通勝の識語がある。

この古写本の扉には、写本一冊、正徹自筆と鑑別した、琴山印の極札が貼付されている。この極札を信用すれば、書写年時は、奥書にいう、永享九年七月十二日となるが、写しとしては、その当時のものとみてよい。正徹自筆か否かの判定は、速断できないが、他の信頼できる正徹自筆本と比較してみても、極めて近似した筆跡であることは確かである。

「正徹詠草」は、大東急記念文庫の所蔵にきすまでに、多方面の所蔵者遍歴をもつ。慶長年間、通勝の目に触れて以降、多数の愛書家の間をめぐったろうが、今日知れるところでは、京都在住守屋孝蔵氏(注2)、岐阜市在住北川清氏(注3)、などの手を経ている。

「正徹詠草」と「草根集」(丹鶴叢書本)を比較すると、次掲のごとく、十八首の一致歌をみいだす(上の数字は、「正徹詠草」の通し番号、次は、初句、下は、丹鶴本「草根集」の巻と頁数を示す。▲は、詞書中の歌)。

11、人そうき	六・二八三	48、いたつらに	六・三〇一
18、夕ひはり	四・一九五	50、月のもる	五・二二五
26、世々かけし	六・二七〇	53、かへり見る	六・二九八
40、よる鹿は	五・二二二	79、九代の	六・三二一
45、さして世に	五・二六三	80、ぬるかうちに	六・三二一
46、夢なれや	六・二七五	81、わたるせや	六・三二一

83、身をかふる	六・三二一	110、かきをきし	三・一六二
105、にほのうみや	四・二一七	111、これよりも	三・一六二
▲はるかなる	三・一六一	112、めぐりきて	四・二一八

以上、十八首のうち、「草根集」の詠歌年代不記の巻である、巻四、五、六に、十一首もみいだされる(79、83は、巻六だが、これは経文部歌に属し、年代がわかっているもの)。他の七首は、経文部歌と、後述する、了俊と正徹との交誼を回想する場面のみである。

ここで問題となるのは、「草根集」と「正徹詠草」の歌稿の位置関係である。それには、まず、両歌集の一致歌に着目するのが、一つの方法であるが、詞書のある一致歌として、次の二箇所を比較してみよう。

(A) (正徹詠草)

廿六日石山にまうつ舟にてな
れハことに見所おほく侍しか
ともみちすから八連哥百韻に
て上下せしかハ連哥などもよ
ますそ侍し御堂へまいりしに
三十あまりのいにしへ故伊与
入道了俊と、もなひてまいり
たりしに御前の西の柱に
▲はるかなる南の海の……
とか、れしに予も筆とりて哥
かきしをみれハきえのこりた

(草根集)

応永の初の頃了俊ともなひ
て石山にまうて侍しに御堂の
はしらに了俊かきつけられし
歌
(イ)、はるかなる南の海の……
予その筆をとりてかきつけし
(ロ)、跡たるゝこゝさへ同じ……
その後廿四年をへたて、粟津
にかりそめに住しころ同寺に
詣てむかし俊公のか、れし歌
を見しにあともなくきえてと

るもしもすくなくなりにしを
あはれにおほえていま又かき
つけし

110、かきをきし南の海の……

紫式部か光源氏つくりしつほ
ねとかやと申所にまかりてか
たハかりつたへし物語のこと
なと思ひて

111、これよりもなかれし水
の……

(B)

人のとふらひに一品経の哥よ
みしに序品を

79、九代のむかしの春の……

安樂行品若於夢中但見妙
事

80、ぬるかうちに見えつる月
の……

薬王品 如渡得船

81、わたるせやいつことたと
る……

懐舊の心を

82、なきあとを老てとふこそ……

83、身をかふる御法の露の……

ころくありしを哀に覚えて
(A)、かきをきし南の海の……
同時源氏の間といふ局の壁に
かきつけし

(B)、これよりもなかれし水の……

九年五月五日藤原敏信おやの
十三回忌にあたり侍るとて廿
八品人人(に一本アリ)すゝ
めしに、序品

(A)、九代のむかしの春の……

安樂行品若於夢中
但見妙事

(B)、ぬるか中にみえつる月の……

薬王品 如渡得船

(A)、わたるせやいつことたと
る……

普門品 聞名及見身
心念不空過

(B)、雲ま行月みし空の……

懐舊

(A)、十年あまりみつしほ遠し……
(B)、身をかふる御法の露の……

(A)では、「草根集」にある、(B)の歌が、「正徹詠草」になく、互に
詞書の表現も相違する。(B)では、「草根集」の(四)の二首が「正徹
詠草」にみえないが、逆に、「正徹詠草」の82の歌が「草根集」
に掲載されていない。

以上の事実は、「正徹詠草」と「草根集」とが、互に直接、依拠関
係のなかったことを示唆していると思う。

次に、見せ消ち本文の問題に触れる。見せ消ちの個所で、主要な
ものを、三個所とりあげてみる。

寄月戀

11、人そなきまつとわかれの二みちにうらみられても月そのこれる

野雲雀

18、夕ひはり聲こそ雲にたかしまのかち野、草は嵐たつらし

104、(詞書)それよりこのたひさそ^(はカ)れたてまつりし人のむろに……

(B)は、「草根集」でも「人そなき」とあり、「正徹詠草」の方の、
単純な誤写訂正だろう。同様に、(104)の詞書は、最初「たてまつりし
人」と書き、その後、必要がないので、削除したケースだろう。(10)

は、丹鶴本「草根集」では、
夕雲雀こゑのみ雪に高崎^xやかち野の草はあらし立らし

とあるが、他の、内閣文庫や島原松平文庫本には、「雪」↓「雲」、
「崎」↓「嶋」となっており、「正徹詠草」の訂正後の本文と同一
となっている。この「こそ」↓「のみ」、「の」↓「や」の見せ消

ちは、単なる誤写でなく、作者の推敲によるものではなからうか。

なお、「草根集」と「正徹詠草」との、十八首の一致歌には、本文に
若干異同のあるものも存するが、そのことの検討は、ここでは省略

する。

「正徹詠草」の出現によって、これまで知られなかった、正徹の和歌が、新たに九十七首（他人の歌二首をさしひき）も加えられたこと、しかも、その歌は、「草根集」のごとき、歌題だけの提示でなく、長い詞書を付し、心情の吐露されたものも多く、正徹の内面を伺う恰好の資料ともなる。その他、従来、しばしば問題とされた、正徹と了俊の交誼の年時をはじめ、正徹の伝記上の解明にも寄与するところが大きく、「正徹詠草」の資料的価値（自筆の可能性も含め）は、極めて高く、貴重なものである。

注1、『大日本史料』八編之十五、文明十五年二月一日参照。

2、『近畿善本図録』昭和八年。井上宗雄氏の御教示。

3、川瀬一馬氏の御教示。東京大学史料編纂所資料控。

凡 例

一、翻刻にあたっては、できるだけ原本のままを原則としたが、次の点は適宜改めた。

(1)、異体字・古体字・変体仮名・略字のうち、通行体に近いものは、通行体に改めた。

(2)、原本の改行はそのままとせず、適宜改めた。和歌は原本は二行書であるが、翻刻では、一字あきをもって改行箇所を指示しておいた。

(3)、本文の和歌に私に、通し番号をつけた。

一、本文の見せ消し、補入など、すべて原本のままとした。

一、原本の丁数の移りには、各々、(1ウ) (2オ) のように示した。

一、原本が虫損で解読不能のところは、□として、右側に推定読みをのしたものもある。

一、本書の翻刻を御許可いただいた、大東急記念文庫に厚くお礼申し上げます。

永享九のとしむ月の朔日のあしたあられのふりけるに筆を試とてかきつけし

1、なへて世にふるやあられもあら玉の としの光をしくかそ見る

二日女松はやしとかやとて世の中こゑくみくかしましきをとかにきくと

2、世にみちて君をやちよと松はやす しつおとめらかこゑそきこゆる(1ウ)

みか月の影よりもまさるさまに月のたかくいてたるを

3、春やとき二日の月のみかの夜の 影よりたかくかすみそめぬる三日のあした日のさしいつるに竹に鶯のなくを

4、あさ日影さすやそのふの異竹に なくねもなひく春の鶯みか月は七日八日の月ほとなるをみて(2オ)

5、みか月をゆみはり月とみるはかり なか空にしてそふ光かな六日夜にいりて新造の家つくりたる人のもとにはしめてまかりて題をさくりて

體

6、さほ姫のかすみのころもひろはたに せるやま袖も世におほふ

らん

三十首の哥よみし中に

花」(2ウ)

7、うつりきて千世へん宿もあたらしき としの春しれ庭の初花

神祇

8、あふけなを女神お神の二はしら めくりしよりのことの葉そこれ

七日つねのとしのことにて連哥の奉行野雲雀のもとにまかりたりし次に續哥よみし中に

早春山霞

9、香久山のみねのまさかきかすむらし」(3オ)しらゆふかくる春のころもて

山田苗代

10、この葉のたねをも春やまきもくの 山田の水になくかはつか

寄月戀

11、人そなきまつとわかれの二みちに うらみられても月そのこれ

人のもとにて哥よみし中に

春戀といふことを

12、身にそしむかすみにもるゝ面影の」(3ウ)さたかにみえし花のしたかせ

十三日北野にまいりし次いつも心にうかふまゝのことを申いて、手向たてまつりし哥

13、神風は松にをとしてすみそめの 袖に吹とむるむめかゝそする

招月にて人々きたりしに三十首哥よみし中に

河邊柳

14、あそやきの神世もきかす唐あるの」(4オ)たつたの河に影みたるとハ

寄舟戀

15、あふせなきうき名をいかゝすみた河 舟こそりてもきしやわたらむ

述懐

16、かきとめむかすならすともゆく水の 玉なすほとゝ哥かたもかな

ある所にて湊春月

17、浪のとにかくする月の舟そよる みなとのあまや袖にまつらん」(4ウ)

野雲雀

18、夕ひはり聲こそ雲にたかしまの かけ野ゝ草は嵐たつらし

下京なる所にて山霞を

19、かくやまやあまきる雪の朝かすみ それとも見えすほすころもかな

祈戀

20、さりとともとうき田のみしめうちなひく するしなきにもひく心かな

山家水」(5オ)

21、むすふ手のいはかき水やひろか覽 世をみちせはくすめるうき身 いつもの國なる人のもとへ舟うきたるかたかきたるあふきやる

とて扇にかきつけし

22、八雲たついつもうらのをいかせに 宮このかたのふなよそひ
せよ

夜思花といふことを

23、春の夜のゆめのたゞちの山さくら いさ見にゆかむおもひねに
して」(5ウ)

寄山戀

24、ふりわけし初ハしらすわきもこか 二かみ山のよそのおもかけ

河邊鳥

25、天の川この水上かかさゝきの わたすやいつこ宇治のはし守

契戀

26、世ゝかけし契のほとをおもはずは 人のつらさになしやはてま
し

印月軒といふ所にて北野」(6オ) 宮にたてまつる百首當座に
てありしなかに

浦霞

27、こゆるきの磯こす浪もをとたかき うら風なからかすむ春かな

落花

28、かつらきや夜半の嵐にちる花も あくるわひしき山のさくら戸

藤

29、たのますや松に契をかけなから」(6ウ) はふ木あまたの花

の藤浪

郭公遍

30、をちこちの山ほとゝきすいく里の 雨夜の空にねをふらすらむ

五月雨雲

31、いはちかき山のかために雲おりて まきの戸とつるさみたれの

比

早秋

32、露くたく草のたもともやすけなき 時なりけりな秋の初かせ」

(7オ)

原月

33、おははらやせかひの水の草かくれ 秋もみまひにくもる月かな

霧

34、峯の雲ふもとの霧の朝ほらけ なかは秋なる木々の色かな

霜

35、きえてをく草木ハいかてしほるらむ 我身霜ふる老そかなしき

霞」(7ウ)

36、はれくもるみ山あらしに雪あられ まなく時なき玉さゝの上

曉

37、あひみはやそのあかつきの法の庭 てらさむ月に袖をつらねて
人の崇徳院にたてまつる哥とてすゝめられし中に

霞

38、すゑの松山の名しるく立こえて けふりの波にかすむ。かな」

(8オ)

苗代

39、たねみゆるなハしろ水ハすみにけり おちほひるひし鳥ハなけ

れと

照射

40、よる鹿は葉山のかげにあらはれぬ ともしの松かねにハなかな

と

七夕

41、あけぬるかかさしの露の玉ゆらも みたれてかへる天の川浪

萩ル (8ウ)

42、萩の戸の秋のむかしをいかはかり 野はらの露にかけて戀けん

槿花

43、あさかほの花と露とはつれなくて まつかけきゆる有明の月

霞

44、ふりかはるあられも色やまさるらむ 猶しるみねの松のしら雪

爐火

45、さして世になすことわさのあらはこそル (9オ) 名をうつミ

火の身ともうらみめ

會不逢戀

46、夢なれやゆめになせともいはさりし その兼言のむなしうつゝ

山

47、いつよりの水のこゝろか山にても なをうきことゝなかれいて

けん

河

48、いたつらに法の衣をたちそきる あひそめ河の波もはつかしル

(9ウ)

懐舊

49、これハみなゆめそむかしの玉のゆか いま見るこけの下のすみ

かも

東山より人のすゝめし哥に

月前萩

50、月のもるおきのすゑ葉のかけながら 袖にみたるゝとこのしら

露

古郷雪

51、ふるさとのよしのゝ山のおくの雲 ゆきさへふかく冬こもり

つゝル (10オ)

忍戀

52、身そつらきしのふのあまのすて衣 あらはれてくつる袖もある

世に

旅行

53、かへり見るけふりの末も東のゝ 草葉にかゝる露の下みち

あたりちかくとゝまりしに陽明院の花さかりになりぬときゝて

行てみれハおもひしほとよりもさかりなりしかハことしも又心

をくれル (10ウ) して花をもすくしぬへかりけりとおほえて夕

つかたまで花のもとにありてとしゝかならすこの花にゆきか

へり侍ることとおもひいてゝ

54、老か身に行てハかへるとしもへぬ あはれはかけよ山さくら花

花さかり覺空上人なともなひて東山の花見にくるたによりは

しめてまかりたりしにル (11オ) 花半ちりてこけふかき老木の

すかたあはれに見えしを

55、老はつる花さへたにのむもれ木に なるかと見ゆる苦ふかくし

て

若王子の花はいまさかりにて日よくはれたる空のしら雲たちい

てたるやうに見えてすこしうちゝりたるにたきのよとみまざる

心地してしつかなる山あらしにかすみのル (11ウ) たゝひた

るなどことのはもをよはずそ見えし

56、みくまの、山さくらともしら雲の 波をかさぬるうらのはまゆふ。

永観堂の花のもとにて

57、いかにして佛もさらにかへりみる この古寺のはなにあかめや
草川のほとりなる禪院に思かけすと、められて日もくれしかハ
これより南ハあかきほとの花を」(12オ) たにみむとてこ、な
る僧達をもかたらひいて、又草川をわたるにちるはなのむら
く、なかれ行をみて

58、むらく、にちりゆく花の雪そよる もえいつる春の草河の浪
花頂はさいつとしのかせにたふれしのちハ片枝ハかりくちのこ
りて花さへ所く、さきてみる人もなくなりぬむかしハ此花をこ
そ東山にも見所ありとて人もあつまりこしか、様に」(12ウ)

成ぬるにも世のためしあはれにおほえて

59、あはれなる花のうき世をおもふにも 老て世にふる身をそら
むる

白鷺寺ハふりにし寺にてありしをあたらしくつくりみかきてこ
と様に成たるをもけふはしめてそ見し

60、花に猶光そひけりしろき露の めくりて照す玉のいらかに
常在光寺にて

61、常に在光とも見す山さくら」(13オ) さきいて、にほふ春の
此世を

通玄庵そいつくの花よりさかりに色もにほひもことやうなる花
にて見所あり門なとさしたるをやうく、にいひてあけさせて見
侍りき入相のかねあまたきこえて暮はつる程にそかへりし

62、かへるさをいりあひのかねはいそけとも 花は夕になさぬ色か

な

あくる日も仁和寺のかた見ありき」(13ウ) しに桂宮院ハちり
過てあを葉のかけにところく、あらしのつてを待かほにそ見え
し

63、さくら花光もうすく成にけり 月のかつらのしけるならねと

神殿の花もやうく、うつろひていたく見る人もなきおりふし僧
かんしきなとあまた来りて花のもとにて酒のミ興のあまりにや
大なる石して花をあるかきりうち、らしてとよミ」(14オ) わ
らひ下枝おしおりなとすれともかむる人もなきをあさましく
見て我さへいか、みむとおほえていそきかへりし

64、花をなとうち、らしてハたをるらん しらなみの名をたちやか
さねむ

御室はすきにしきさらきのハしめかくれさせ給ぬとてかすかに
いづくもたれこめて春の行ゑもしらすかほに人のけもせず寝殿
のかたに陀羅」(14ウ) 尼などのこゑかすかにきこえて御庭の
木すゑもあを葉かちなる花の色うれへかほに松かせこふかく吹
しろい水のをとも物さひたるやうにて涙もなかれにそふ心地そ
し侍しふるき宮の御なこりもた、この一所にそおハしましつる
にことほりの御としなれともなこりかなしくおほえ候せ給て

65、みむるなる竹の園生の代々の跡 この一ふしにたゆるかなし
さ」(15オ)

66、見し人もあらしのさそふ夢の世を 花もしるかとうれへかほな
るか
かくてたちかへるとてことしも花のすくる事あはれにて

67、あはれをもおほく見し世になからへて ことしも花に又そをく
るゝ

ある所にて題をさくりてよみし中に

遠村花

68、やとにさく花ゆへ春へとはすやと なかめてしりぬをちの山さ
と」(15ウ)

春岡

69、さくらちる岡邊のまくすもえやらて 風をうらむるわか葉たに
なし

春曉月

70、月を猶なこりかすみて在明の つれなくみえし春の夜の夢
春日西洞院草庵をたちいつることありし比思つゝけし

71、いかならむしらぬ岩木のかけにかは しハしの露の身をもをか
まし」(16ウ)

卯月一日老母侍る山さとにまかりてとゝまりし夜ほとゝきすの
なくをきゝて

72、なきてけり卯月の空のしのひねを 一夜もまたぬ山ほとゝきす
かりそめのやとりにありし初人のもとへ申つかはし侍

73、君へとへいのちまつまの草の庵 ありしにまさる露のかなしさを
返し」(16ウ)

74、草のいほ露まさり行ありかには 心をわけてをかぬまそなき
かりのやとりにて月前時鳥といふことを

75、ほとゝきすなく一こゑに月はなと 夜わたりはつる雲路なる覽
契戀

76、契あらはこひしつらしといはずとも あはれと人やおもひよは

らむ

罨麥を」(17オ)

77、ませのうちにおほしたてつるかひあらハ 心なをきそなてして
の露

嶺照射

78、さみやみみねのともしそ影みゆる 野にふす鹿もゆめなきまし
そ

人のとふらひに一品經の哥よみしに序品を

79、九代のむかしの春の花のひも とかすハおなし光とも見し

安樂行品若於夢中但見妙事」(17ウ)

80、ぬるかうちに見えつる月の宮こ人 にはひも影も袖にうつれる

一葉玉品 如渡得船

81、わたるせやいつことたとる朝霧に 舟こきむかふ焔の河長

懷舊の心を

82、なきあとを老てとふこそ哀なれ やかてしのはむ人もあらしを
身をかふる御法の露の玉殿も ふりぬるこけのしたてらすらし

清水寺のかたはら菩提心院といふ寺に後廻河院の御影わたらせ
給を見たてまつりて十住心院といふ寺にまかりたりしに童の哥

よむありしを人々興して哥よむへしとて十首題をさくりてよみ
し中に

首夏郭公

84、ほとゝきす昨日の春のうくひすは ふりぬる山をいてゝなく也
端午日人のもとよりあやめに」(18ウ) つけて

85、たえかたきことの葉くさのなかきねや 人しらぬまのあやめな
らまし

その日ハほかへまかりて六日につかはし侍返し

86、時すきて人もすさめぬかくれぬの けふのあやめやわか身なる

らむ

むろのやしまにて

旅泊水鶏

87、くひなたにさもうつせみのからとまり むなしき空をなにと、

く覧」(19才)

夕立涼

88、ゆふたちのなこりの露の衣手に かゝるもすゝし木々の下かせ

雨中螢

89、夕まくれ消ぬほたるを雨となる むかしの人の玉かとやみん

寄車戀

90、ふりはてしあしよは車やすらひに ゆきつかれぬるこひのみち

かな

ある所にて一品經講せし次に」(19ウ)

夏月

91、すゝしハ風にさほひし夕たちの つゆまきはさぬこすの月影

夕戀

92、わきもこかゆふかみ山の夕霜に しれかし人の秋のおもひを

ある寺にて

夏夜明易

93、露はらふ木す糸のかせの木のもとに おちあへぬまの月そあけ

ゆく

風のまへなる浮雲のきえを」(20才)まつほと水の□のうたか

たのたゝよふびまも心のはゆる時もかなとせめきつる老のかす

よりも世のうきさかそ身にあまりぬる長雨さへ夏のはしめより

やむ時なき袖の露けさいかにして秋まちつけむまでとうちなけ

かれつゝあかしくらすおりしも関のこなたにさそふ水のあはれ

むたよりにうかれいてゝ」(20ウ)六月の中の七日宮をいて

ぬ賀茂河しら川なとわたるにいつに見えわかぬほとに遠きわた

りに成ぬる天の河なとの心地して中院大納言の交野ゝみのゝと

よまれし哥などおもひてられし

94、ふる雨になかれもわけす浪こえぬ いづれかも川しらかはのみ

つ

のり物なとにてこしかと猶みちもくるしき心ちして松さかをこ

えしに」(21才)

95、なからへてさのみに老をまつさかや ゆかてこゆるも猶そくる

しき

四宮かほらはむかし蠟丸の宮もわら屋もとなかめし所とかや博

雅の三位とかやみとせまでかよひて三曲なとつたへけるとかけ

にはてしなき世のならひにてあともなし

96、あらましきせきのあらしを身にしめて いかゝしらへし四絃の

聲

はしり井をすくるとて」(21ウ)

97、むすハぬもすゝしかりけり山かけや みちゆきふりのはしり井

の水

あふさかの関の清。ははやくより跡もなきさまになりて駒のか

け見ゆへくもあらず

98、逢坂のしみつハあともなかりけり 小川の浪そたえず関もる

関のかたハらに弘濟寺といふ禪院にそとゝまりぬる呉竹の葉こ

- しに湖(なみ)〇るく〜と見えて」(22才) 三上山からみ山さしむかひて遠きいふきのふもとの雲につゝき北はかきりなきけふりの波もきはまらずみゆるこしまそ晴くもるけしめみえて比良のたかねひえのたけまことに千里の波をかたしくらむと見たさるからさき志賀などハこゝよりハみえすかりにゐるへき所などしつらひてしつまりぬるにもかくても」(22ウ)すまゝほしくうかるへききゝみゝもすこしうすらくやうにそほえし夕つかたたちいてゝすゝみ侍るまゝ十七日の月も雲間ながらさしいてぬれは風かよふ松の木かけの夕すゝみ たゝこのまゝにたちまちの月かくてその日より日に二たひつとむる事なとありてあかしくらすひまにハ物かきてなと申」(23才) 人々もありなとせし中に宮こよりよそ〜に見なれし童のことにしるよしにてよろつをみたすけはこくまれ侍るをかの御けしきとりてなとかみ給ひなからかくはかりハあらぬならひなるをとありかたくみ侍し比光源氏のまき〜の名かきてとありしをかきてつかはすとておくに
- 100、なき世まで鳥のあとにそのころとも」(23ウ) よしかきをかむひな鶴のため
廿二日にて園城寺入堂参社なと申侍し金堂にまいりておもひつゝけし
- 101、生あはゝ我身をてらせ世にいてん そのあかつきのあり明の月三井をむすひて
そこ清き水の心をくみしるも 猶そかしこき三代の皇
新羅大明神の御前にて」(24才)
- 102、日本の法まもりにとしらきより うつれる神も君か代のためけにやみほの神の御前にてかくよみたりし
いつて舟こくとはみえす此神の 御まへのおきやみほのうら波如法堂などのをもしるさハこと葉にもつくしかたけれハ中〜かたハらいたくてよみいですなりぬそれよりこのたひさそはれたてまつりし人の」(24ウ) むろにたち入侍ぬこゝハ猶ハる〜とつらなるみねも庭のまかきの山とみおるさるゝ松の木す糸の嵐も浪のをともひとつにきこえ行ちかふ舟のほかけうきたる雲の日かけにかはりゆくもさためなき世のならひしらせかほにすへてすまゝほしきことそおほく見えし所につけたるあるしなとよろつけふは心をふる事おほくなむ」(25才) 人々題をさくりて哥よまれし中に
- 湖上夏月
- 103、にほのうみやくにつ三上のさゝ波に うちいてゝみれば月そすゝしき
逢戀
- 104、世々のえもかへりてふかし夜半の浪 かねておもひもかけぬ契に
関路難
- 105、あふさかや旅ねにもあらぬたひねして せきちの鳥にいく夜なれ来ぬ」(25ウ)
鞆中橋
- 106、ほとちかきせたのなか橋たちかへり わか老のすゑにかけたたのまむ
古寺水

109、御法をも後の佛にゆつり葉の 三井の清水のかけそさかゆく

連歌などありて夜に入てかへりぬ廿六日石山にまうつ舟にてなれハことに見所おほく侍しかともみちすからハ連哥百韻にて上
下」(26才)せしかハ哥なともよます侍し御堂へまいりしに
三十あまりのいにしへ故伊与入道了俊とよまひてまいりたり
しに御前の西の柱に

はるかなる南の海の補陀羅君石の山にもあとはたれけりとかゝ
れしに予も筆とりて哥かきしをみれハきえのこりたるもしもす
くなくりにしをあはれにおほえていま又かきつけし

110、かきをきし南の海のうたかたも きゆるもしほのあとそかなし
き

紫式部か光源氏つくりしつほねとかやと申所にまかりてかたハ
かりつたへし物語のことなと思ひて

111、これよりもなかれし水のみなもとを わつかにくめるすゑをし
そおもふ

志賀の夏敷ハ所からおもしろくあひかたきことなりしかハ晦日
の夕にいてゝみそきなむし侍し」(27才)その次に哥のありし
に

夏敷

112、めぐりきて又あひかたきみそき哉 ちのはすかぬく志賀のうら

浪

恨戀

113、身をうらのあまのたくなわり返し ならひくるしきよそのい

さり火

七月一日立秋の心を

114、あさまたき露をかけてや消ぬらむ 水のおわつての秋の初風

七夕かちの七葉にかきつけし名」(27ウ) 所織女七首の中に

115、天津ほし又あふさかやかたよらむ こよひなあげそせきの岩門

この後さきの哥もあまた侍れともさのみやハつたなきことのは
かきをき侍らむ十三日ハ宮こにかへりぬへきをまたこの関こえ
んことありかたかるへしなと心ほそきをかやうのはかなきこと
の葉かきつけてなと夜の鶴の枕のかことも」(28才) 霜にふり
ぬる老をさへいとほす毛衣かはすハかりになれ侍ぬれハ閑もり
のうちぬるなとや人もとかめぬへきとおもひはゝからざるにあ
らされともせり川のむかしけふはかりこそとおほめきし人も心
のかよふことほりにて京極中納言百首などかきつけしち又こ
の草をかへすこしとゝめ侍そかたはらいたくおほゆる」(28ウ)
かりころもけふはかりなるなこりをハ なれし雲井のたつともわ
するな

招月清岩

永享九年七月十二日書之

仙密主 まいる 「(29才)

此一帖詠歌墨痕無疑者乎

如今慶長戊申仲秋十六日一覽

之次記之

也足叟(花押)「(29ウ)